

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全文を見ることができます。

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュースNo. 6 4
2008(平成20)年5月15日(木)発行



<1932(昭和7)年5月15日は、犬養毅首相等を暗殺した「五・一五事件」の日>
海軍急進派青年将校は、首相官邸、日本銀行、警視庁などを襲撃。日本ファシズム台頭の契機となる。

“世界は9条をえらび始めた”

<08年5月4・5・6日 幕張メッセ「9条世界会議」報告>



世界中で紛争が絶えず、武器が次々と作られています。
地球環境の変化が人々を脅かし、貧困は広がっています。
そんな世界でいま人々が注目し始めているのが、日本の憲法9条です。
「武力によらず平和をつくる」
この9条の考え方を、いま、世界で生かしたい。
戦争のない世界のために。
一人ひとりが、平和に生きられる未来のために。<大会挨拶文より>

9条世界会議

◆参加者もいらっしやることと思いますが、5月4・5日、千葉県幕張メッセで開催の初の「9条世界会議」に参加してきました。大盛会で感動した意義深いメッセージなどの要点のみ報告いたします。(文責・事務局 山崎健一)

◆5月4日は、全体会と音楽ライブ。主催者の予想をはるかに上回る参加者が全国から駆けつけ、会場は1万2千人の満席。入場できなかった人は3千人もいました。杖をついた老人や、若者も大変多く、憲法9条を守ろうという人々が増えていることに大きな希望を感じました◆私は早朝4時前に原町を出発したので、会場の前の方の席に座ることができ、お隣は高知からの元気な若者グループでラッキーでした。

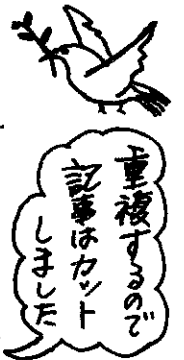
◆海外30カ国から150名以上の参加者もあり、世界各地の第一線で体を張って活動されている著名な方々のお話は、同時通訳でも、さすが説得力がありました◆また多種多様なグッズ販売や展示の広いブース会場も大盛況。22歳の教え子が東京の九条の会のブースを開いていて、ちょっとした時間でしたがお互いの活動のことなど談笑したり◆翌5月5日は、数十の分科会が開催され、あらためて9条が世界から注目されていると実感しました。

●仮にもノーベル賞受賞者が来日し、3日間で二万人もの人が集まり、国際的な平和を求める大集会でしたが、大新聞やテレビ局はあまり取り上げてくれませんでした。▼5月5日付『朝日新聞』コピー



守ろう9条 会場外も人・人・人

千葉世界会議



世界の希望としての9条

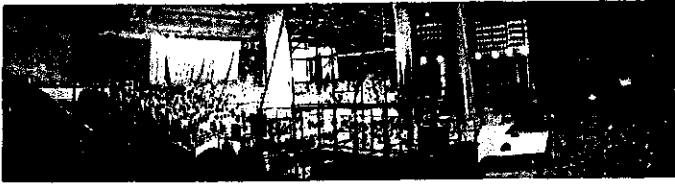


「この集会は歴史に残る集会です。世界最強の軍隊がイラク戦争で小さなバグダードにさえ平和を実現することができないでいる。やはり武力で平和は創れないのです。子や孫が殺し合う時代はもう終わりにすべきです」

○司会者吉岡達也、25年間国際交流NGOピースボートで市民平和外交を実践

「日本は軍事に浪費せず、生活のために遣ってきたために繁栄してきた。第9条は60年間にわたって世界に希望を与え続けた。しかし、日本が平和憲法、特に9条をないがしろにすることは、被爆者への侮辱です。対話こそ唯一の平和の方向です」○マイレッド・コリガン・マグワイア、北アイルランド・1976年ノーベル平和賞受賞、6日の仙台会議でも講演<裏面に掲載>

「日本は決して一人ではありません。非武装で軍隊を待たないというコスタリカの憲法は、米軍の駐留を拒否し超大国アメリカの圧力を押し退けました」○バルガス、コスタリカ代表



◀幕張メッセ会場 音楽ライブも盛りだくさんで
東京都内400人の弁護士さんコーラスのベートーヴェン
第9番合唱付きの生演奏、高橋竹山、普天間かおり、
ナターシャ・グジー、亀淵友香、湯川れい子、加藤登
紀子の歌など、5月4日は延々夜9時まで続きました。

日本だけでなく「世界の9条」です

「名古屋高裁の9条違憲判決はすばらしい。軍隊を完全に放棄した南米のコスタリカでは、『空軍は鳥で充分、陸軍は蟻で充分、海軍は魚で充分』と言います。アパルトヘイトも植民地も奴隷制度も廃止し、女性の地位向上なども達成出来たのだから、戦争だって廃止できます。世界は変えられるのです」

○コーラ・ワイス、アメリカ・60年代のベトナム反戦からの平和運動家



「日本だけでなく、世界の9条です。年々「9条は変えない」と考える人が増えています。南米のエクアドルでは外国基地を置かないという憲法を可決し、ボリビアの大統領は「新憲法には日本の9条を入れたい」と表明しています。貧困や温暖化も進み、もう戦争をしている場合ではない。ジョン・レノンのあの『イマジン』は、交戦権を否定した第9条のことを歌っています」

○池田香代子、翻訳家、『世界がもし100人の村だったら』を出版

「私が22歳で第24条（男女の平等）を書きました」

シロタ女史▼

「終戦直後、マッカーサーは国務大臣の松本蒸治が新憲法を書けばいいと思っていたが、松本は民主的な憲法を書くことができなかった。だから1946年2月4日の午前10時、民生局のホイットニーに20人ほどがよばれ、「あなたたちは今日から憲法草案制定会議のスタッフにする」と言われびっくりしました。そして私は女性なので人権担当3人うちの一人に選ばれ、「女性の権利について書いたらどうでしょう」と言われた。

ジープに乗って図書館に行き、本を集めて私は非常に人気者になった。7日で草案を作らなければならなかったが、自分の経験で日本の女性に必要な権利を考えた。賢い少数の日本人は、24条のような女性の権利を望んでいたのです。1952年に占領軍がアメリカに帰った時、保守的な新聞記者や政治家は「24条は22歳のシロタには書けたわけがない」と言われたりしました。

他の民生局のメンバーは、日本の憲法研究会の案も入れた。新憲法には歴史的な叡智が入っていて、GHQが押しつけたとは言えない。日本政府はあまり喜ばなかったが、国民は喜んで受け入れた。保守的な学者は「押しつけたから改正すべき」と言うが、「押しつけ」とは自分よりいいものを与えたときは言わないのです。アメリカの憲法より日本の新憲法の方がずっとすばらしく、「押しつけ」というのは正しくありません。

今、日本の憲法は改正しないで外国に宣伝すれば、9条がモデルになるでしょう。平和でみんな一緒に手をつないで、子と孫のためにいい平和な世界を創ることができるでしょう。」

○ベアテ・シロタ・ゴードン、アメリカ・元GHQ憲法起草者、ウィーンで生まれ東京で育つ。マッカーサーの翻訳家。日本国憲法草案作成時に、日本における男女平等についての条項（第24条）を担当した。（※映画『日本の青空』でも24条制定の場面は印象的でした。こんなに自前で歴史的な人物シロタ女史の、片言の日本語でしたが鋭刺とした声で歴史の証言を聞くことができ、大変興奮しながら一言も聞き逃すまいとメモを走らせました。今回の9条世界会議の圧巻でした）



「私が4度目のイラク渡航の際、武装集団に人質にとられました、9条のおかげで解放され、命が救われたと思っています」 ○高遠菜穂子

マ
グ
ワ
イ
ア
さ
ん



「暴力的な方法は効果をあげることは決してない」

＜5月6日、「9条世界会議」仙台集會に参加して＞

会場の仙台サンプラザホールは満席で、立ち見や通路に座る人も大勢いるほどで、東北各地からの参加者の熱気が会場一杯に広がっていた。

オープニングは、仙台藩伝統郷土芸能の早川流真坂鹿踊りで、殺生を嫌うある事件に由来し、夫婦鹿の優美な舞を讃える仲間の姿を表現、まさに平和を希求する「9条世界会議」にふさわしい幕開けでした。

北アイルランドでの30年に及ぶ紛争の中、対話による平和的解決を求め続けたマグワイアさんの語りかけは、静かな中に重みのある言葉であった。「暴力的な方法は効果をあげることは決してないと気づいたのです」「殺し合わないことを選ぶこと、人間の権利と尊厳の堅持を選ぶこと」。マグワイアさんが長年にわたって活動し獲得したこうした教訓は、すでに日本国憲法前文に、第9条に書かれているのです。多くの先人たちの尊い命でもたらしてくれた憲法の堅持こそ、私たちの務めと、改めて感じてきました。（報告・事務局 石田賢二）

北アイルランド紛争で暴力に頼らない大規模な平和デモを展開、非暴力運動提唱。1976年ノーベル平和賞受賞。5月4日幕張メッセ会場でも基調講演。